

## あくびの仕方

炬ばたで犬があくびをする。それは心配事はあしたのばせという、猟師たちへの合図である。遠慮も会釈もなしに伸びをするこの生命力は見て美しいものであり、この手本をまねないわけにはいかない。その場にあわせた者は、だれもかれも伸びやあくびをして、これが寝にゆく序曲となる。あくびは疲労の徴<sup>しるし</sup>ではない。むしろそれは、内臓の深呼吸によって、注意力に富んだ精神、議論好きの精神に与えられた休暇である。自然はかように精力を更新することによって、生きることだけで満足し、考えるのに飽きたことを、告知させるのだ。

注意力を傾けたり不意打ちに驚いたりする場合にいわば息がとぎれることは、だれでも認めるところだ。生理学は、胸郭にどんなぐあい強い防御の筋肉がくっついていて、それが動くとき胸郭をしめつけ、麻痺させるばかりであるかを示して、この点についてあらゆる疑いをとり除いている。そして、降伏の合図である両手を高くかかげる運動がそのまま、胸郭を楽にするのもっとも有効であるのは、注目すべきことだ。しかし、これはまた、力いっぱいあくびをするためにも最良の姿勢である。このことから、あらゆる心配事がどうやってわれわれの心臓を文字どおり締めつけ、行動の下絵がただちに胸郭を押し、期待の姉妹である不安を生じさせるかがわかる。つまり、われわれはただ、待つことだけが不安なのである。そしてこのことは、事柄がよるに足らぬものである場合でも同じである。この苦しい状態からまもなく、自分に対する怒りである焦燥が生ずるが、これではわれわれはいつこうに楽にはならない。儀式というものは、こうしたすべての拘束から成り立っている。それを服装がさらに重苦しくする。また伝染ということが起こる。退屈というものは感染するからだ。ところが、あくびもまた、伝染性儀式の伝染性療法である。どうしてあくびは病気のように人にうつるのかと不思議がる人がいる。私の考えでは、病気のようにうつるのは、むしろ重苦しさ、注意、それに心配な様子などである。そして、生命の復讐であり、いわば健康の立ちなおりであくびは、その反対に、厳粛さの放棄やいわば無頓着の誇大な宣言によってうつるのだ。それはだれもが解散の合図のように待ちうけている合図である。この気楽さの誘惑にはかなわない。そのため、どんな厳粛も負けてしまう。

笑いとすすり泣きは、あくびと同種類の、しかしいつそう控え目で矛盾した解決法である。そこには、一つはつなぎとめ、一つは解きはなつ、二つの考えのあいだのたたかひが見られる。これに対して、あくびの手にかかると、結びつける考えでも解きはなす考えでも、すべて逃げ去ってしまう。生きることの気安さが、それらの考えのどれをも追いはらってしまうのだ。そういうわけで、あくびをするのはいつも犬である。神経症と名づけられる種類の病気ではあくびが必ずよい徴候であることは、だれでも観察できたはずだ。ちなみに、この種の病気では病気はまさに考えによってつくられる。しかし、あくびはそれが予告する眠りと同じく、どんな病気にもよくきくものと思われる。そしてそれは、われわれの考えというものがさまざまな病気につねに大いに関係がある徴である。これは、自分の舌を噛んだときの苦痛を考えてみれば、さほど驚くことはあるまい。舌を噛む<sup>ス。モルドル</sup>という言い方の比喩的な意味が自分の言ったことを後悔することであってみれば、後悔<sup>レモエ</sup>して悔恨が傷害にまでもむきうることがよくわかる。これに反して、あくびにはなんの危険もない。

(1923年4月24日)

*A L A I N : Propos Sur Le Bonheur* アラン 幸福論より  
串田孫一・中村雄二郎 訳 白水社 ①

も少し引用してみると、

人生は哲学にそむく。怠惰のないところに幸福はなく、無用の物だけが満足をもたらす。

チエーホフ/ロシアの作家

生活はすべて次の二つから成り立っている。したいけれど、できない。できるけれど、したくない。

ゲーテ/ドイツの詩人・作家

一年じゅうがただ遊ぶだけの休暇だったら、遊ぶことは働くことと同様に退屈だろう。

シェークスピア/イギリスの劇作家

月夜に夜なべはせぬが損、稼ぎに追つく貧乏はなし。

近松門左衛門/浄瑠璃作家

人生のはじめの四十年は本文であり、あとの三十年は注釈である。

ショーペンハウエル/ドイツの哲学者

ほんとうの道は一本の綱の上に通じている。その綱は空中に張られているのではなく、地面のすぐ上に張ってある。渡って歩くためよりはつまずかせるためのものであるらしい。

カフカ/ユダヤ人のドイツ語作家



戦後「民主主義」「社会」の分業化ばかりが「成り立って」ヒトとしての共通用語である言ノ葉は、斯々然々 批評家に任せておんぶにだっこ、「作家」（ここでは、従来のモノ書き作家のコトでなくモノ作り屋としての作家だが）は、ロクなコトバを吐いてない。

『英語は話さないし、今後も今更学ぶつもりなどない』って云い切った 先、ノーベル賞<sup>賞</sup>科学者(現・京都産業大教授をなぜか大マスコミ

は元・京大名誉教授の方を使いたがるが、)は、燕尾服での授賞式でも、米国在の、この国の同受賞者がチャンと相手に目を合わせ賞を受けたのに対し、あくまで見事にその時も授ける側の人間の目をみようとはしなかった。(様に T.V.映像から私はうけとった。年が明けて、新年の子供たちとの集いの映像でも彼は、順々に握手する彼らに視線を合わせている様子はなかった。合わせていたのかも知れない。アクションが少ないだけなのかも・・・だったら、背丈がうんと高い授賞者を上目づかいに見ることなどできなかった、とみるのが正しいのかも・・・)

無理やり辻褃合わせれば、このことを「インター・ナショナルなんていらぬんじゃないの」っ

て言葉で私に云ってくれた 山岸信郎さん(1929 生)と、「作家なら孤独を引き受けなきゃ」って言葉で私に云ってくれた 三須康司さん(1931 生)の二人が昨年、共にアチラに逝ってしまった。

片や、東京での初期・現代美術を担っていた日本橋・室町の田村画廊・真木画廊の主。

此方、開廊以来十数年間で、ほんの数人の個展をもっただけの蒲田にあった二人称・画廊の主。

私が作家として育つ過程で大きな影響を得た M 氏が六月、Y 氏が十月、どちらも私が長期の旅(といっても、この国の中での旅だけ)から戻った直後にそのコトを聞き及んだんだが・・・

ヤマギシもミスもキリストも、ブツダも共に云っていた「何も同じじゃなくていい」ってナ!

人間の死ぬのはいつも早すぎるか遅すぎるかよ。でも、一生は、ちゃんとけりがついてそこにあるのよ。一本線が引かれたからには総決算をしなければ。あんたは、あんたの一生以外の何ものでもないのよ。

サルトル/フランスの作家・哲学者

善人は二人しかいない。一人は死んだ人で、もう一人はまだうまれていない人。

中国の諺

二人が同時に歌うことはできるが同時にしゃべることはできない。

ドイツの諺

言いたいことを言うものは聞きたくないことも聞かねばならない。

イギリスの諺



♪ 夕焼け小焼けで日が暮れてエ

「俺が夕焼けだった頃、弟は胸焼けだった---分かるかな? ワカンネエダローナ!」

は、松鶴家千とせ

「わかっちゃいるけど、やめられない」のが、植木等

「別れる切れるは芸者の時に云う言葉---」は金色夜叉の名セリフ

分かるは切れる、分からないからこそが、他者<sup>ひと</sup>であり、分かち合えるの<sup>ゆえん</sup>所以なり

ロートレアモンも云ってたが『解剖台の上でミシンとこうもり傘が偶然出合ったように美しい』って、

美<sup>※1</sup>とか、芸術<sup>※2</sup>なんてそんなもんじゃなかるうか

分かり易ければ客は入るのか? 短絡的な大衆<sup>※3</sup>迎合主義に陥ってしまいすっかり安直なテーマ展示・パークと化した、バブル期乱造、各地の雨後のタケノコ美術館だけじゃないが、

今一度、引用の数々を---

#### ※ 1

美というものは物に即したもので、物そのものであり、生きぬく人間の生きゆく先々に支えとなるもので、よく見える目というものによって見えるものではない。美は悲しいものだ。孤独なものだ。不幸なものだ。人間がそういうものだから。

坂口安吾/作家

規則通りにいかないもの、すなわち思いもよらないとか、不意打ちを喰わすとか、びっくりさせるとかは、美の本質的な一部分、美の特質である。

ボードレール/フランスの詩人

美とは想像界だけにしかあてはまりえず、その本質的構造のうちにこの世界の無化を蔵している価値である。

サルトル/フランスの作家・哲学者

誰もが美術作品を理解したが。だが、なぜ小鳥の歌を理解しようとししないのか?

ピカソ/スペインの画家

花、無心にして蝶を招き 蝶、無心にして花を尋ねる

花、開くとき蝶来たり 蝶、くるとき花開く 知らずして帝則に従う

良寛/僧・歌人

#### ※ 2

芸術とは目に見えるものを写すことではない。見えないものを見るようにすることなのだ。

クレー/スイスの画家

芸術はもっぱら生活をうつす鏡である。

ハイネ/ドイツの詩人

芸術のための芸術は一步を転ずれば芸術遊戯説に墮ちる。人生のための芸術は、一步を転ずれば芸術功利説に墮ちる。 芥川龍之介/作家

富裕階級に逸楽を提供することを目的としているわれわれの芸術は売笑婦に似ているどころではない。売笑婦以上の何物でもない。

トルストイ/ロシアの作家

芸術は真理ではない。芸術はわれわれに真実を会得させるところの嘘である。芸術家は嘘の真実を他人に納得させる方法を知らなければならぬ。

ピカソ/スペインの画家

四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう。

夏目漱石/作家

自分の独創性を守ろうとして汲々としているものは、これを失う一步前にいる。

シューマン/ドイツの作曲家

芸術はそれ自体目的ではない。人間性を表白するための手段である。

ムゾルグスキー/ロシアの作曲家

芸術とは人間のなかに再創造された全宇宙である。

ブールデル/フランスの彫刻家

芸術においては裁判官は必要ではない。それに判決を下す者こそが実は裁かれねばならない場合がしばしばある。

ルオー/フランスの画家

芸術は、命令することができぬ。芸術は、権力を得ると同時に死滅する。

太宰治/作家

真の芸術家は、妻を飢えさせ、子どもをはだしにし、七十歳になる母親に生活の手助けをさせても、自分の芸術以外のことはなにもしないのだ。

ショー/イギリスの作家

ひとかどのものを作るには、ひとかどの人間でなくてはならない。

ゲーテ/ドイツの詩人・作家

### ※ 3

人民大衆は限りない創造力をもっている。

毛沢東/中国の政治家

大衆は自由な討議・批判が許されるなら、あらゆる問題を把握する能力を持っている。この点においては、大衆の感覚は、支配階級の連中や御用学者たちのそれより遙かに鋭いものだといえるのである。

大山郁夫/政治学者

大衆はものを書かない批評家である。

ヴォルテール/フランスの思想家

とるに足りないようなことでも、新しければ烏合の衆を喜ばす。

エウリピデス/ギリシャの悲劇詩人

民衆は海だ 芸術は船だ 舟は波をかきたて 波は舟をすすめる

ト・フー/ヴェトナムの詩人

もっと、引用してやろう

風刺の生命は真実である。それは必ずしもこれまでに実際にあった事柄でなくてもよいが、必ず現実に起こり得ることではなければならない。

魯迅/中国の作家

正確さは決して真実を語るものではない。

マチス/フランスの画家

早く仕事をするからといっていいかげんな仕事をするわけではない。それはその人もつ落ち着きと経験いかんの問題だ。

ゴッホ/オランダの画家

人間は考えることが少なれば少ないほどよけいにしゃべる。

モンテスキュー/フランスの思想家

人間だけが赤面できる動物である、あるいはそうする要のある動物である。

マーク・トウェーン/アメリカの作家

人生はもともと、悲愴なものとかっけいなものとの結合がなくては耐えられないほど宿命的に厳粛である。

ハイネ/ドイツの詩人

滑稽も人間の深いところから発する時は、たちまちにして悲愴なものとなる。

アナトール・フランス/フランスの作家

この世は考える人達にとっては喜劇であり、感じる人にとっては悲劇である。

ウエルボール/イギリスの作家

「ブルース！心が病むときひとびとがつくる歌、それがブルースっていうものだ。悲しくておかしき歌……おかしがるには悲しすぎ、悲しがるにはおかしすぎる」

ラングストン・ヒューズ/アメリカの黒人の詩人 詩 黒人 ジャズ 木島始 著 昌文選書 ②

悲しさが多すぎると笑いを呼ぶ。喜びが多すぎても涙を催す。

ウィリアム・ブレイク/イギリスの詩人・画家

ほんものの涙は悲しいページからではなく、みごとに置かれた言葉の奇蹟から引出される。

コクトー/フランスの作家

私は人生のなかから何か厳粛な題材をとってきて、それから私の見つけ出されるかぎりのすべての喜劇的效果を引き出す。

チャップリン/イギリスの喜劇俳優

一人を殺すと殺人、千人殺すと英雄。

インドの諺

嘘をついてしまったら二度嘘をつけ、三度嘘をつけ。しかしいつも同じ嘘でなければならない。

オリエントの諺

不器用なおどけは冗談にならない。

イツップ/ギリシャの寓話作家

よき細工は少し鈍き刀を使ふといふ。

吉田兼好/歌人・随筆家

過ぎたるは猶及ばざるが如し。

孔子



感受性は言葉の上には建設されない。あらゆる建設は退屈な完成、金メッキされた沼地の淀んだ思想人間の相対的生産物に向かう。芸術作

品は美そのものであってはならない。なぜなら、それは、すでに死んだものだからだ。陽気であっても、悲しげであってもならない。明るくても暗くてもいけない。聖なる後光でつつまれた菓子や反身になって空を駆けぬける汗を提供することで個人的人間を楽しませ、あるいは手荒にあつかうものでなければならない。

芸術作品は人間の力を超えたものという意味により客観的にすべての人にとって、決して美しくはない。だから、そこには批評など必要ない。批評は各人のために主観的に存在しているにすぎず、一般性など少しもない。 (略)

貪欲な大衆にまで届かない文学がある。創造的な作家の作品、作者自身のための作品だ。法則が真っ青になる。最高のエゴイズムの認識。……どのページも奥深く重厚なまじめさの、渦、めまい、新しさ、永遠なるものや、途方もない悪ふざけや、行動原理への熱狂や、印刷術によって爆発しなければならぬ。これが地獄の音階を持つ鈴と婚約した、過ぎ去るよろめく世界。その一方で新しい人間がいる。粗野で跳びはねているしゃっくりの騎手。手足を切断された世界と改良に苦しむ文学のやぶ医者たち。

トリストラン・ツァラ／ルーマニアの詩人

『ダダ宣言 1918』からの抜粋「ダダ3」所収(チューリヒ 1918年 12月)

美術の歴史 第2巻 H.W.ジョンソン著 村田潔・西田秀徳 訳・監修 美術出版社 1990 出版 ③

---

---

運河と国際 海と闇 針金フジ写真で囲まれた二つの円環その上を、  
半ば閉ざされ吊り下げられて  
風景・断片・素描の束が、マイ・フェイヴァリットの曲にのり、  
それぞれ追いつ追われつして廻る……これ即ち、軽美術なり。

---

---

丑年の春開催の、私の個展にふさわしく、大きなあくびのそのあとの、  
牛のよだれにさも似たり だらだら長いチョー駄文。  
ここでめでとしようじゃないか！

私が常々敬愛して止まない 平岡正明 氏 の数々の文章の断片と、1973年、田村画廊でのたった三日間だけの私の個展の案内状(ワラ判紙にガリ版刷りの)に記された マイケル・ローズ氏の一文を紹介して、今回のコメントとする。

ひばりと百恵……二人の女の民主主義

美空ひばりと山口百恵の距離は十九キロだ。ひばりの生れ育った横浜の滝頭<sup>たきがしら</sup>と百恵が育った横須賀不入斗<sup>いりやます</sup>の距離だが海岸沿いの国道16号線ですんなりだ。その十九キロの間に戦後歌謡曲史を二分する二人の天才少女があらわれたのは不思議な気がする。 (略)

ひばりのレコードデビューは昭和二十四年、十二歳時「河童ブギ」百恵は昭和四十八年、十四歳時「としごろ」で、その間二十四年。この時間は遠い。 (略)

東京湾のほんの一角、隣町への移動にすぎないのに、美空ひばりは横須賀を一曲も歌わず、山口百恵は横浜を一曲も歌わなかった。その点で遠いのである。 (略)

芸術は多数決ではない、実力社会だ。ひばりはその実力によって芸能界に君臨し独裁しました。その代償でもあるかのように、死ぬまで歌いつづけその実力と権威を自分一代限りのものとして家元にもならず、相伝もしなかった。不幸と醜聞を芸の糧ともした。

百恵は歌の純度をひたすらに追った。その純度で周囲を洗い浄めた。妻になり母になる市民的なふつうさを獲得するために全盛時のただなかで引退した。一人の女として貞淑の美德にしたがった。そんな十九キロだ。

平民芸術 三一書房 1993年 第一版第一刷 発行 ④

江戸深川の新内、ラプラタ川河口のタンゴ、ニューオルリンズのジャズ海拔ゼロメートル地帯の粋は、水もしたたるほどだ。 (略)

クリオール的顔癩感とはなにか。アホいということだ。フランスのデカダンスにアホさはない。

白人ジャズにもアホさはない。地理上の発見以来四百年、地上を支配してきた白人たちは、真善美体系に呪縛されてアホになれない。 (略)

ブルースは民族音楽である。ジャズは都会音楽だ。ブルースは合衆国南部奴隷地帯のあちこちで同時多発的に生まれた人種音楽であってどこで生まれたと特定できないがジャズはニューオーリンズで生まれた。フランスの制度と習慣の遺産たるクリオールがいたからであり、公娯街のストーリーヴィルがあったからだ。ブルースは歌であるジャズは器楽である。南北戦争後の南軍軍楽隊の放出楽器があったからだ。軍放出楽器はニューオーリンズに限らないのに、この港町でジャズが生まれたというのは楽器を買う金がクリオールにあったからだ。

1. 1900年、三遊亭円朝が死に、サッチモが生まれた。したがってジャズは落語の生まれかわりである。
1. サッチモ 1928年の「ベーズン・ストリート・ブルース」のあまりのすばらしさが80年後にアメリカ合衆国に黒人大統領が出ることを予言している。(黒人演歌のジェロにも繋がる)

括弧内は筆者による

## 黒人大統領誕生をサッチモで祝福する

平岡正明 愛育社 2008年11月5日

初版第一刷発行 ⑤

かずかずの うそうそしい言葉より

たったひとつの 嘘が大好き

この歌を 八田淳からもらったのは、ちょうどおとしの秋であった。彼の体軀に似つかわしくない弱々しくも傲慢な感じがして正に彼の素性をあらわしている様で図らずも頬がゆるんだのだがこれをまでもウソとしてしまう彼にはテレ以前のまことしやかな SENSIBILITY を覚え ‘弱き故の表現’ がかるうじて彼を成り立たせている(?)のではあるまいかと思う。70年 京都近代美術館の現代美術の動向に出品した徐々に消えゆくプロセスを示したのや 又、72年京都ビエンナーレの壁から床に向かって奇妙な斜角をもって張られた一本のロープや、73年京都アンデパンダン展の斜めに置かれた赤い二枚の板 同じく73年京都ビエンナーレでのロープを内蔵した石膏の棒などこれらの作品において、彼の視点が根ざしているのは‘隠微’という彼特有のロマンであろうことは、それまでの作品につけられた CUT というタイトルを見ても察することが出来るのだが、あからさまな積極性 乃至 消極性を欠くロマンチストに、今尚少なからぬ疑問が残るのは私だけではないであろう。

シリアスごっこを忌み嫌う彼にとって今回の個展が果たして彼の隠微！な二面性を示すか？

それとも華麗！な二面性を示すか？非常に興味あるところであるが、少なくとも八田淳 個人にとってある種のエポックを感じずにはおれない。

返歌

あさっても あしたも今日も

きのうにも ころころならずも 心あるのみ

1973年11月 京都にて

マイケル・ローズ

困難なのは物事をつくるのではなく、物事をつくるための状況に身を置くことである。

ブランクーシ/ルーマニアの彫刻家

ダダ…前衛芸術の誕生… マルク・ダシー著 藤田治彦・監修 「知の再発見」双書138 ⑥

後ろ盾なく無鉄砲 矢面に立つ 身ひとつ

そろそろ出番だ いっしょにやろう

2009年3月

八田 淳

①/②以外の引用 スピーク…文庫に『世界の名句引用辞典 監修 扇谷正造・山本健吉・本多顕彰・宮 柊二 自由国民社刊 練馬区立 貫井図書館より借用

② 筆者の蔵書 ③④⑥ 練馬区立 光が丘図書館にて書写

⑤ 2008・11・14 浅草/木馬亭「変回人間登場」にて購入、著者のサイン入り